

## アイヌ文化の今から未来へ

8月11日(土) 14:40~16:10 広島会場

9月29日(土) 14:40~16:10 函館会場

講師 **結城 幸司** アイヌ・アート・プロジェクト代表

イランカラブテ、結城幸司です。今日は「アイヌ文化の今から未来へ」というテーマでお話をさせていただきます。

みなさんのようにアイヌの歴史や文化に興味をもって勉強される方は別として、現在、学校で使われている教科書では差別とか人権という分野でしかアイヌの歴史や文化が出てこないため、多くの方はアイヌはマイノリティーであるという印象しか持っていないのではないかという気がしています。

1457年にアイヌと和人の最初の大きな戦いとされているコシャマインの戦いがありました。この戦いで亡くなった人たちを慰霊するため、毎年7月の第1週に北海道の上ノ国町でコシャマイン慰霊祭が行われているのですが、これに僕は毎年参加してきました。去年からは若手でありながら祭主、カムイノミクルと言うのですが、「カムイ」と言われる神々に言葉を捧げる役目を任されて緊張しながらやっています。

僕の考え方の中には「対和人」という考え方はありません。しかし、こうした啓発セミナーなどで、アイヌの文化は素晴らしい、アイヌのことを理解してくださいと言った後に、こういう差別がある、これが足りない、あれが足りないというような話をする人もいます。僕自身も子供の頃、父親の世代の人たちが「差別！差別！、足りない！足りない！糾弾！糾弾！」と対和人に対して物申していたことや、日常生活の中で友達のように話している和人であっても、その人がいないところで「あの、ずるシャモが」とか「シャモが」という言い方をしているのを聞いて育ったので、子供ながらに和人は何か悪い人なんだというふうに思っていた時期もあります。

「シャモ」という言葉は、本来「シ・サム」というアイヌ語で、「隣に住む人」とか「よき隣人」というような意味の言葉です。これが訛って「シャモ」になったのですが、アメリカ人が日本人を悪く言う時に「ジャップ」という言い方をしますが、これに近い、言い殴るような、アイヌ語にとってはあまりよくない言い方です。僕は「シサム」よりも先に「シャモ」という言葉を覚えてしまいました。北海道において和人とアイヌは表面上普通に生活していますし、僕自身、和人の友達もいますし、母親も和人です。しかし、そういう中でも、なぜか最終的なところで「アイヌだから」、「和人だから」というような雰囲気の中で育ってきました。

先ほどのコシャマインの戦いの後、シャクシャインの戦い、クナシリ・メナシの戦いなど和人とアイヌの大き

な戦いがだいたい200年ごとくらいにあるのですが、そうした話より自分のことを話すのが一番分かりやすいと思いますので、自分史から見たアイヌ文化というものを皆さんに紹介したいと思います。

今日は、このようにアイヌの着物を着て話をしていますが、アイヌというと「いつも着物を着ているんですか」とか、下手をすると国籍を聞かれることもあります。大通りでストリート音楽をやると、演奏と踊りが終わると年配の方から「アイヌって国籍がどこなんですか」とか「ふだんはどこに住んでおられるんですか」というような質問をされる時があります。「今でも山の奥に住んでいるんですか」などと言われると、この人は普段何を考え、何を勉強して社会的な情報を得ているのだろうかと思うくらいがっかりしてしまいます。まだ、アイヌは遠い存在なんだなと感じてしまいます。

今、多文化コミュニケーションとか異文化教育ということが行われていて、僕も札幌の中学生や高校生、大学生、その他に修学旅行生たちを相手の話をすることがあります。年間に10校くらいは回っていて、藤女子大や札幌学院大学などには毎年呼ばれて行っています。そこでは新入生を相手に話をしますが、必ずやる必要があります。何も知識を入れないうちに事前アンケートに答えてもらうのです。北海道の学生だからアイヌのことは知っているだろうと思ってアンケートを出すのですが、返ってくる回答には荒唐無稽なものもたくさんあります。例えば「仮面の軍団」とか「羊飼いで、それから「熊を食べる人、サケを食べる人」、この他に「裸族」という回答もあります。厳寒の北海道で裸の民族はありえないと思うのですが、どこかの先住民のイメージと混ざっているのか、ふざけているのか、ちょっとカチンと来ることもあるのですが、これまでずっと見てきて、ほとんどの学生が何も分かっていないんだということに気がきました。

自分の生れ育った大地の歴史を知らずに学校を卒業して大人になっても、その環境の中にアイヌという言葉はそんなに出てこないでしょうから、北海道にいてもアイヌのことを知らずに人生を過ごしてしまうのです。僕は差別と言うのは嫌いですが、これは差別だと思います。ほとんどの人が何も知らされない、知らないまま育つということは、後々、僕の子供、僕の孫の世代は、本当に何も知らない人に囲まれ、理解されない中でアイヌ文化を伝えていかなければならないということであり、そう考えるととても悲しいです。

学生を相手に話をする時に、最初のうちは僕も一生懸命年表を勉強して、歴史について話をしていたのですが、ほとんどの学生たちは寝ています。興味が無いのです。何回かやっているうちに、どうしたら目を向けてくれるのだろうかと考えました。そこである日、講演中に「君たちの学校がある、例えば札幌、豊平、手稲という地名はすべてアイヌ語です。そのことを知っていましたか。」という言い方をすると、学生たちもガツンとくるのか、そこからはじめてアイヌについて興味を持って質問をってきます。そして、自分たちの住んでいる土地の本当に意味を調べたり、アイヌのことを調べるといふことをはじめます。

やはり書かれている歴史というのは、こういう事実があった、何々があったという文字の羅列です。そこに心のケアというか、その時の当事者であるアイヌの気持ちはどうであったのかとか、なぜアイヌがアイヌと言えなくなってしまうのかということまでは歴史学者は語りません。本当の歴史というのは、文字として書かれていることだけではなく、こうした歴史の裏側で重ねられてきた傷の中にあるという話をすると、学生たちは心を開いてくれます。

そうした話をした後、学生たちに事後アンケートを出します。授業の感想などを書いてもらうのですが、すぐに回収しないので学生たちは家に持って帰ります。そうすると親が回答を書いてくることがあるのです。何が書かれているかといいますと、カッコして母親ですと書いてあって「実は、私の小さいころ、クラスの中にアイヌの子がいて、クラスみんなで、犬が来たとか、毛深いとか、プールに何で入らないのとか言っていていじめました。私も、かわいそうだなと思いつつも、みんなと一緒にいじめる方に回っていたような気がします。そのことが今でも心に引っ掛かっています。今回、娘からこのアンケートを見せられて、娘にどういうことを伝えればいいのかということを考えさせられました。」というようなことが書かれてくるのです。このことは、生活の中、文字に書かれた歴史とは違う生活の中で、和人の中でもアイヌが忘れ去られたのではなく、ただ、見ないように、さわらないようにしてきたということではないでしょうか。

いろいろな学校に行き話をするのですが、最初は、アイヌに対してしゃべらなければいけない、アイヌに元気がないからアイヌに対して何か一緒にやろうという話し方をして、アイヌが、アイヌがと考えて話をしていました。ところが、自分に子供が生まれて、僕には4人の子供がいるのですが、だんだん大きくなってきて、学校に行かせるようになって、初めての父母面談の時は、胸がドキドキしてしまいました。僕は木版画、木版画というのはアイヌ文化にはないものですが、その中にアイヌの物語を込めた作品を作っています。まだそれで食べてはいませんが、それが職業だと思っています。そのため、学校へ出す書類の親の職業欄には木版画家、もしくはアイヌ

文化の伝承者と書いていました。また、アイヌ・アート・プロジェクトという25人のメンバーを引き連れて、あちこちで、アイヌは素晴らしい、何だかんだと言っている自分が、いざ、娘の学校での父母面談に向かって車を運転している時に、先生に自分がアイヌだと言ったら、娘がいじめられるのではないかと、もしかすると言わない方が娘のためにいいのではないかと考えている自分に気がつきました。子供の世界、教室という凝縮された世界の中で、いったんいじめが起きたとしたら、その波が静めることは難しく、それを乗り越えられる人もまれで、そういうことに娘にはあって欲しくないという親心もあって、アイヌだと言うのはやめようかどうしようかと考え、ドキドキしながら先生と会いました。すると、「ああ、結城さん、アイヌですね。今度、学校で、アイヌのことを勉強させたいんですけど、教えに来てくれませんか」と言われて、ガクンとなったりしました。

小学校や中学校など、学校の先生の中にはアイヌのことを伝えなければ北海道の歴史を教えたことにならないという感覚を持っている先生がたくさんいます。逆にこういうことを言ったらこうなるのではないかと、あれこれいろいろな心配をしてしまうのが、僕らの世代のアイヌの真の姿なのかも知れません。

僕は1964年4月に釧路市の春採というところで生まれました。後々分かったことですが、この春採というところは釧路にいたアイヌの人たちが強制的に集められた場所として有名どころです。子供の頃はそうしたことは知らなかったのですが、周りにはたくさんのアイヌの人たちがいて、アイヌの子供だけが行く保育園やアイヌの人たちだけの銭湯もあって、今考えると差別的なことだと思うのですが、それが普通の環境だと思って育ちました。

僕のおばあちゃんもおじいちゃんもアイヌです。おばあちゃんは、もともとギリヤーク人だったと親父に言い残して死んだとも言われていましたが、少し調べてみると釧路の塘路のアイヌだということ間違いありません。おじいちゃんは僕が生まれた時にはすでに亡くっていたのですが、結城庄太郎と言う立派なアイヌでした。

この結城庄太郎の話を少ししたいと思います。今考えると不思議なことなのですが、僕の生れた生家には寝室に仏壇がありました。これだけなら別に不思議なことではないのですが、その仏壇の横に願いを込めているような顔をしたキリスト様を描いた油絵があったのです。そして、窓の外を見るとヌサというアイヌの祭壇があったのです。このように三つの神仏が共存している光景というのは、子供のころには普通に見えていたのですが、ある程度成長してからは不思議に思っていました。調べてみると、それにも理由がありました。

一つは、結城庄太郎が、キリスト教の伝道師を育てるための学校で教育を受けていたということです。この学校は明治の初頭にイギリス人が主体になって函館につくったもので、日本政府が土人学校を作る少し前に作られ

ました。『アイヌ神謡集』の著者として有名な知里幸恵さんのおばに当たる金成マツさんや辺泥和郎さんをはじめとしたアイヌの人たちはそこに集められていました。結城庄太郎もそこに集められたアイヌの一人だったのです。そのため、家にキリストの絵が飾ってあったのです。調べてみると、この学校で使われていた聖書は、ローマ字を使ったアイヌ語で書かれているものもありました。おじいちゃんが英語を話せたかどうかは分かりませんが、アイヌ語を使って、日本語を使って、さらにはローマ字を使って教育を受けていたということです。

1899年にアイヌを保護するということが北海道旧土人保護法が施行されました。しかし、この法律をはじめ明治になっていろいろな法律や制度が作られたのですが、ほとんどのアイヌの人たちには理解されていなかったようです。その中でうちのおじいちゃんは、日本語が分かって、文字も分かっていたので、旧土人保護法についても理解していたようです。この旧土人保護法では、農業をやるうとする人にはある程度の土地が与えられたのですが、当時の春採アイヌの土地を集めて100万坪の牧場を作って、アイヌだけで経営しようという発想もしたそうです。それくらいユニークな存在というか、聡明な人だったようで、春採では結城といえ少し有名なアイヌだったそうです。そのため春採のアイヌの人たち何か相談ごとがあると、うちのおじいちゃんやおばあちゃんを頼ってきていたそうです。僕が生まれた時には、すでにおじいちゃんはいなかったのですが、おばあちゃんのところにいるいろいろなアイヌの人たちがやってきていたことを覚えています。

おばあちゃんのところ誰かが来ると、おばあちゃんたちはアイヌ語で話をしていました。僕には何をしゃべっているの分かりませんでした。何かのリズムのように聞こえるので、聞き耳を立てていると追い払われました。これは各地域でよく聞く話ですが、上の世代の人たち、おばあちゃんたちの世代の人たちは、子供や孫たちにアイヌ語を教えない、あまりにも差別が厳しいからアイヌ文化を身につけさせると子供たちの不幸につながると考えたのではないかと思います。

先ほど、僕がアイヌ、アイヌと言いながら生きているにも関わらず、子供たちのことを考えて、アイヌと言わない方がいいのではないかと感じてしまったという意識と変わらないのではないかと思います。

そうした形の、祖母として、親としての思いというのがアイヌ民族の中にはあったのです。こうしたことはなかなか語られることはなく、言葉が禁止されたとか、文化が禁止されたというように何文字かの文字で書かれるだけなのです。しかし、そこには、文字では表わされないおばあちゃんの思いというものも歴史の中にはあるのです。

おばあちゃんは、僕にアイヌ語を聞かせないようにしましたが、ベカンベ祭りには連れて行ってくれました。

ベカンベというのは、菱の実のことで、忍者のまきびしのような形をした、栗のような味のものです。おばあちゃんは普段和服を着ていたのですが、この時は、チジリというアイヌ文様を刺繍した着物を着て、タマサイという大きなネックレスを首にかけて、本当に楽しそうに行きました。

僕はひとりで生まれてきたわけではなく、母親と父親がいます。アイヌはよく貧乏だと思われているのですが、僕が生まれた頃、うちには車もあったし、テレビもありました。そのため小さい頃は、何か変に金持ち面したスネオ君みたいな子供だったのではないかと思います。それが、いつの頃からか、車がなくなり、何がなくなりとうちの家が傾いていっていると子供心に感じるようになりました。

それが、なぜかと言うことです。その頃、親父は阿寒で木彫りの店をやっていました。また、当時、大変有名になっていたコロポックルの版權を持っていて、木彫りの工場を作り、そこにアイヌの人たちを集めて、木彫りのお土産品を大量に作って販売していたのです。ところが、親父はそうした商売を急にやめてしまったのです。いつか母親は、何も言わずに僕の前からいなくなりました。母親がいなくなって何日間かというのは、親父はとて優しく、いろんなところに連れていってくれたりもしました。それでも、母親がいなくなったということで、とても寂しいという思いが僕の中にありました。

親父はすべての商売、すべての仕事をやめて何をしたかということ、アイヌ解放運動に没頭していったのです。親父の名は結城庄司と言います。もう亡くなりましたが、1960年代から80年代にかけて、アイヌ解放運動のリーダー的存在として運動していました。母親は、そうした運動をする父親についていけなかったのだと思います。母親がいなくなった後、しばらくの間、おばあちゃんと暮らしたのですが、1年もしないうちに、そのおばあちゃんも亡くなってしまいました。その後は父親と二人で暮らしたのですが、父親はたまにいなくなることがありました。例えば3日家をあけたり、1週間あけたりという具合です。そうした時は、子供ながらに知恵を絞って、近くの親戚の家に行って御飯を食べさせてもらったり、泊めさせてもらうということをしていました。後々、いろいろな人から、そうした時、父親は警察で取り調べを受けていたということを知りました。

その一つの証拠として、うちの前にパトカーが1台やって来て止まるということが何回もありました。そうした時は必ず2人のお巡りさんがいて、1人は僕を連れて海とか山に行き、サッカーボールなどで遊んでくれました。その時、僕は、お巡りさんは制服を着ていて格好いいし、優しいし、いい人だと思っていました。でも、同じ時に、もう1人のお巡りさんは、親父の取り調べをしていたのです。同じように、お巡りさん来たとしても、親子で随分と差があったということです。

当時、左翼と言われる人たちが、北海道庁爆破事件など、さまざまな事件を北海道で起こしました。そうした時に、最初に疑われるのが、アイヌ解放運動をしている親父だったのです。

そんなことの他に、僕の周りでは、こういう事件もありました。近所でバイクが盗まれたという事件です。僕は、その頃、車が大好きだったので、何か乗り物が家の近くに来ると、そのことを覚えていました。ある時、家の前にカブが停まっていたことがありました。その時、一緒に住んでいたおじさん、中学校3年生くらいだったと思うのですが、そのおじさんのところにお巡りさんが来て、襟首をつかまえて「お前やったんだべ」と言うのですが、おじさんは何もしゃべらないのです。それで、お巡りさんは「まったくしょうがないな、アイヌは！」と言ったのです。その途端、おじさんの目からぱあっと涙が流れ出したのです。その光景を見た僕は7歳くらいだったのですが、もしかすると、アイヌはそんなにいいもんじゃなにか。アイヌというだけでなぜそんな言い方をされるのだろうということを子供心に刷り込まれてしまいました。そこからアイヌに対して疑いをもち始めたのです。それまで、おばあちゃんも親父も、アイヌであることに誇りを持っているということを話していたので、そんな悪いものだと受け止めていなかったのです。しかし、周りに見える光景というのは、酒ばかり飲んでるアイヌの人がいたり、何かいららして犬をけ飛ばしているアイヌのおじさんがいたり、アイヌはあまりいいものではないと感じるようになりました。

おばあちゃんが死んだ後、しばらくして、神奈川のおばさんが、アイヌ差別を逃れて神奈川に出て暮らしていたおばさんなのですが、僕を引き取ってくれることになりました。親父に対する思い、アイヌに対する思いというものが、何も解決されないまま環境が変わることになってしまったため、その時は、アイヌは大嫌いだという思いしかありませんでした。

親父は純真な気持ちで、アイヌは何も悪いことはしていない、お前達は自信を持っていきるんだということを言って、アイヌ解放運動をしていました。今では本当に親父のことを尊敬していますが、その時は、なぜ、家庭を壊してまでやるのか、なぜ、何かあると最初にアイヌが疑われるのか、という思いを持ったまま神奈川に行ってしまったのです。

神奈川では、アイヌということでびくびくすることはありませんでした。アイヌと言っても、「うん？」と首をひねられるくらいのもので、アイヌだということで差別を受けることはなかったのです。

神奈川にいる僕のところに、年に何回か父親が来ていたのですが、『リンカーン』とか『キュリー夫人』というような、当時の僕にはよく分からない本を持って来ていました。その時は、本屋にはもっと楽しい本があるのにと思ったのですが、思い返してみると、何か人権のこ

ととか、未来のことを考えなさいというようなメッセージが込められていたのではないかと思います。でも、その頃は、たまに来て、小言を言っていただくおじさんのように思えて、何年かすると会うのも嫌だと思ふようになりました。そのような感じだったので、神奈川での子供時代はアイヌとしてではなく、1人の日本人として過ごしていました。

アイヌとは関係のない事件ですが、僕は18ぐらいの時に事件を起して渋谷警察署に捕まったことがあります。正直に言うと、暴走族をやっている捕まったのです。その時に何年かぶりで親父と会うことになりました。捕まった時のことですが、たくさん仲間たちと一緒に捕まって、取り調べを受けました。名前を聞かれ「結城幸司」という名前を書いたら、ちょっと間を置いて何人かの警察官がやって来て「お前、もしかして結城庄司の息子か」と聞くのです。その後、「お前、何をやってるんだ、何かやるつもりなのか」と、僕だけ他の仲間とは違う取り調べを受けたのです。その当時でも、親父は左翼としてマークされていて、社会的には余りいい存在だと思われていなかったようです。まだそんなことをしているのかとも思いましたが、親父は身元引受人になってくれて、嫌いだと思っていた親父と何年かぶり会うことになりました。顔を見た時には涙が溢れ泣いてしまいました。

不良もやっていたのですが、まじめに生きなければ育ててくれたおばさんに申し訳ない、悲しい思いをさせてはいけなないと思ひ、本当は絵描きになりたいと思ひながらも、サラリーマンになりました。当時、バブルが起ってくるという状況の中で、高卒の僕でも大きな不動産会社の社員になることができたのです。そして、バブルと同時に僕にもすごいお金が入ってくるようになり、入ってきたら入ってきたなりに遊んでしまったという80年代があります。

その80年代に、親父が何をしていたかということ、例えば札幌のど真ん中で、アシリチェップノミというシャケを新しく迎える儀式を復活させたり、登別で、アイヌのお墓があるところに、新しいお墓をつくらうとした和人がいたので、それを糾弾したりということをしていました。でも、その頃、僕は、マハラジャに行って女の子をナンパしたり、あとはボブ・マーリーのレコードなんかを聞いて、へらへらしていたような気がします。

そのように僕と親父の人生はすれ違い、僕の中のアイヌ文化も消えかかっていた。そうした時、バブルのはじけて勤めていた会社が潰れてしまい、僕は行き場を失ってしまいました。それで、数々の自己啓発本を読んで、自分を鼓舞するのですが、どんどん社会に押しつぶされそうな気がして、学歴もない、何もないということが、自分の中で大きく膨らみ、どうしようもなくなっていました。

その後、建設業に入って、一生懸命やったのですが、お金で遊び切ったキリギリみたいな感じで、それこそ

泣きながら暮らしていたような気がします。どうにか自分で光りたい、誰かに見つけてもらいたいという思いで、自己啓発本を読み続けていました。そうしているうちに、インディアンの本に出会いました。そこに書かれている内容、例えば差別のこと、動物たちに対する考え方、それから、木の声を聞けとか、大地の言葉を聞けとか、その本を読み進めていくと、なぜか知らないけれど、そこに書かれていることは、ばあちゃんが語っているような、子供の頃、ばあちゃんが教えてくれたことの一つ一つのように思えてきました。そして、春採でのたくさんの思い出がフラッシュバックのようによみがえってきて、あっ、ちょっと待てよ、俺、アイヌだよなって思ったのです。そのようにして、僕がアイヌに目覚めたのは20代後半のことです。

その10年近く前に親父は亡くなっていたのですが、親父の書いた『アイヌ宣言』という本が残っていたので、改めて読んでみました。そのときに初めて、今の自分と余り変わらない年代の時に運動していた父親の姿とか時代背景、父の苦しみとか、アイヌの人たちの差別の苦しみということに気がつき、浮かれて、そうしたことは全然違うところで生きてきた自分は不甲斐ないという思いにかられました。そして、自分の中にアイヌという意識が入り込んできたのです。それは、国際先住民の10年がはじまる頃で、社会の中でもアイヌに対する盛り上がりというものがある、さまざまな本が出されました。そんな本を読みながら東京で暮らして、ちょっとずつアイヌに戻っていったような気がします。

その頃、東京にアイヌの人たちが集まる「レラチセ」という居酒屋があるということを知りました。この「レラチセ」は、レラの会というアイヌの団体が中心になって、東京のアイヌの人たちが安心して集まれる場所を作ろうということで作った居酒屋なのです。今は中野に移っていますが、当時は早稲田にありました。そういう店があると知り、僕はその「レラチセ」を訪ねて行きました。

最初はおっかなびっくりで、アイヌだと認められないのではないかと、今さら出て行って何になるだろうと思いつつも、何かちょっと恋しいという思いを持ちながら「レラチセ」に行きました。そこに1人の女性がいました。その人は宇梶静江さんという方で、今も元気で、「古布絵」という絵本を出したり、いろいろ活躍されていますが、その人と出会います。僕が店に入っていくと、「いらっしゃいませ」と言って僕の顔を見るなり、絶句したのです。何もしゃべらないのです。そして、ぼろっと涙を流したのです。その時、僕は、えっ？何だろう？何かを感じてくれたのかな？社会に押しつぶされそうになっている自分を、この人は気づいてくれたと思い、ちょっと変な喜びがありました。それで「名前は？」と聞かれて、「結城幸司です」と答えたら、今度は、ぼろぼろ涙を流して「やっと帰ってきたか」と言って抱きしめてくれ

たのです。その時、初めて会った人だったので、抱きしめられて戸惑いもありましたが、何か、ここは自分の居場所だと感じました。宇梶さんの存在がなかったら、アイヌに戻ることはできなかったのではないかとも思っています。この宇梶さんは、俳優の宇梶剛士さんのお母さんでもあります。

それで、「今、仕事何やってるの？」と聞かれ、「建設業」と答えたら、「その仕事をやめて、うちの弟のところに行きなさい」と言われ、宇梶さんの弟で、浦川さんという人のところで働かせてもらうことになりました。そこには、少しは売れていましたが、まだ俳優だけで食べていかなかった宇梶剛士君もアルバイトをしていて、剛士君と一緒に仕事をしながら東京アイヌをやっていました。

それから、いろんなミーティングやシンポジウムに顔を出すようになったのですが、何かしっくりこないものがありました。それは、いつも、どこへ行っても差別差別なのです。差別から始まって差別で終わるのです。アイヌには、何が足りない、これが足りない。この教科書は、これがだめだ、あれがだめだ。そうしたことも正しいと思います。ただ、そうしたことで、希望というものが生まれてくるのだろうかということを考えました。こんなに誇るべきアイヌ文化、素敵なお模様のユーカーがあるのだから、もう少し違う形でアイヌ文化が出てくればと考えたのです。

それで、だんだんと自分のスタイルも変えて、いつか、アイヌの若者だけで何かグループを作って、何かできたらいいなと思っていたところ、ちょっとしたチャンスが2000年に巡ってきました。

その頃、働かないと食べていけませんし、「レラチセ」で働いていた今の僕の奥さんとの結婚生活もあって、チョコレートを作る会社で仕事をしていました。そして、週末の度に、アイヌに着替えて、アイヌがどうのこうのと、沖縄に紛れて差別運動をしていました。でも、その着替えるという感覚が嫌だったのと、常に差別ということも嫌だと思っていました。そして、何か命がけでアイヌ文化を背負えることがないかと思っていました。そこに、札幌で「イタオマチブ」というアイヌの海洋船、板綴舟を作る事業があるという話が来たのです。数多くのアイヌの男たちが集められて伝承事業が行われるのです。僕は考えました。もちろん舟を作るということもすごく魅力的だったのですが、それ以上に、作った舟に乗ってサハリンに行く、海を越えるとうふうにも聞いていたので、そちらの方に魅力を感じたのです。30を過ぎていましたが、アイヌとして命をかけてうち込むことができるチャンスだと思ったのです。着替えるという感覚ではなく、いつもアイヌでいられるのではないかと思います。希望を持って家族を連れて札幌にやってきました。

船の伝承事業が始って、直径が1m50cmくらい、長さ20mくらいのセンの木が大型トレーラーで運ばれてきました。それで、舟を作りはじめました。その時、チャー

ンソーなど、近代的な道具も使ったのですが、アイヌの知恵が主体となった伝承事業だったので、カルチャーショックを受けました。僕はお金を出して、物を買って消費するという現代人だったので、人間の知恵だけで何かを作り出していくということに驚き、そうした作業に魅力を感じました。そして、指導してくれた秋辺得平さんの言葉の一つ一つに魅力を感じ、たった1カ月でしたが、生きたアイヌ文化に触れて過ごすことができ、その素晴らしさに酔いしれていました。

だんだん船もでき上がってきて、やっとサハリンに行けると思っていたところ、どうもそうではないらしいということが分かってきました。その時、同じような世代のアイヌが集まって共同作業をしていたのですが、みんなは元々北海道で、僕だけが東京からの参加でした。そのみんなも、でき上がった舟に乗ってサハリンへ行くという希望を持って舟を作ってきたと思うのですが、「やっぱりな」とか「そうなんだ」という感じで、すぐにあきらめてしまうのです。それまで僕は、北海道だからアイヌはみんな生き生きしているだろうな、荒くれ者もいるだろうけど、強いんだろうなというイメージを持っていたのです。ところが、一番元気がないのがアイヌの若者たちでした。

僕はがっかりしてみんなに「お前たちさ、希望を持ってイタオマチブを作ったじゃないか、その希望を持ったということはすごい宝物なんだよ、自分たちのアイヌ文化で持った宝物なんだよ」と言っても、ただにやにやするだけで、何も答えてくれてないのです。それで、ある日、飲みながら、今、うちの副代表をやっている早坂に「何でいつもそんなに意気消沈しちゃうの？自分の座右の銘って何？」と聞いたら、「出る杭は打たれる」と言いました。そんな座右の銘ってあると思いますか。何かアイヌのことで目立とうとすると、いつも、打たれるということもあったようです。

それで、話し合いをしまして、当時35、6歳、若者という年でもなかったのですが、俺たち若い人間だけで、何か自立的なイメージでアイヌ文化つないでいくことをやってみないかということで、アイヌ・アート・プロジェクトを立ち上げました。

いろいろな活動をする中で、伝統の美しさ、伝統から伝わってきたものの大切さ、考え方、そういうものは大事なのですが、常にアイヌ文化を表現する時には、過去の引用されたものになっています。例えば、アイヌ文化振興法という法律に基づいて行う財団の事業にしても、古いもの、伝統的なものにはお金が動きますが、新しいもの、現代を生きる者に光があたることは少ないような気がします。

明治初頭から皆さんと同じような教育を受けて、アイヌ語を話さなくなって、日本語で暮らしていて、情報も一緒、学校のシステムも一緒という中で、現代のアイヌは生きています。なのに、アイヌ文化をやるときだけは

過去のものなのです。でも、アイヌ文化に影響されたミュージシャンや影響された考え方を持つ和人や海外の偉人がいてもいいと思います。伝統の文化と現代のものが合わさって、新しい文化ができてもいいと思いますし、その方が自然だと思っています。

先ほどの副代表ですが、実はハードロックずっとやっていて、別にアイヌと重なるところでやっているわけではなく、普通の若者としてロックをやっていたのですが、その彼が、アイヌの言葉でロックをやりたいと言ったのです。僕らはギターを知ってるし、ドラムも知ってる、ベースも知ってる。その中で、アイヌの歌を作ってもいいのではないかと、またそれが必要ではないかと思ったのです。言葉を大事にして、古いものをつなげていくと同時に、新しい文化を作り出す、そういう力もアイヌ文化には必要ではないかと考えています。

子供たちが希望が持てるようなシステムで、私たち大人はアイヌ文化を伝えているのかどうか、言語については、まだまだ復興されていません。先日、やはり財団の事業なのですが、親と子のアイヌ語教室というのをやらせてもらいました。子供と一緒にアイヌ語を勉強するという事業です。子供たちを見ていて思うのは、本当に子供の脳は柔らかいと思います。ユーカラを覚えるにしても、僕はまず、日本語で覚えて、それからアイヌ語というふうに遠回りをしてしまうのですが、子供ははじめから、アイヌ語で覚えてしまうのです。つまり、ネイティブとして、アイヌ語を自分たちの母語として身につけられるのです。だから、本当は子供のうちに、アイヌ語学校のようなところで、しっかりとしたアイヌ語教育を受けられるようにして、子供たち、さらにはその先の孫たち、ひ孫たちにアイヌ語をはじめとしたアイヌ文化を伝えなければいけないと考えています。

アイヌ文化振興法というのは、10年ほど前にできた法律です。この法律は、技術や芸術、つまり、文化だけ、それも古い文化を守っていくというものです。30代後半になって、僕が技術や芸術、何も持たないでアイヌ文化に取り組もうとした時、この法律による事業は有効に使えませんでした。もっと、生活に根差した法律への変化、特に子供たちに対する項目や考え方について変化させる必要があると思っています。

僕は木版画をやっています。もともとアイヌ文化にない文化です。アイヌ文化には文字がなかったのですが、今は文字を使ってアイヌ語を覚えたり、いろいろな技術を覚えています。そう考えると、アイヌ文化を表現しようとする時、例えば、ユーカラに出てくる奇想天外な物語はコンピューターグラフィックで表現できるかも知れません。また、映画があってもいいと思います。そういう、今を生きる、次にあるアイヌ文化というものが、本当は大事なのではないかと思ったり、それを選んでいくのは、この時代に生きる私たちだと思います。

北海道には、「自分はアイヌだ」と言い切れない人たち

がたくさんいます。僕はまだ元気がいいので、こんな発言をしています。帯広なんかに行くと「結城さん、私の地元でもう、アイヌって言わないで」と泣きそうな顔で言ってくる人もいます。アイヌと聞くと、嫌なことを思い出してつらくなる、まだまだ差別があって、なるべくアイヌを遠ざけていたいという言葉も入ってきます。そういうことを聞くと、考えて考えて答えを出すのですが、その答えは、誰かがやらないと、誰かが生きた文化としてアイヌ文化を主張していかないとだめなんだということになります。

そうしたことは、僕だけではなく、今では20代の若いアイヌの子たちが東京で「アイヌ・レブルズ」というグループを作って、アイヌ語でラップをやったり、いろいろな表現をしています。この他にも、映画を作ろうとしている人たちもいますし、どんどん自分たちの文化として、アイヌの文化を発信して、未来へ向かうような作業も少しずつされているような気がします。

今の若者たちは、僕らが行けなかったアジアへの旅とか、人間を見るための旅、世界の先住民とか、もちろんアイヌ文化から、何かを学ぼうという若者たちが出てきているような気がします。こうしたことは、僕らの上の先輩たちが、差別、差別、糾弾、糾弾と言って、一生懸命運動したことの延長の上にあるのではないとも思います。アイヌに対する社会の目も緩やかになった今、アイヌ文化に甘えることなく、後天型のアイヌ文化をつくることを目指すべきだと思います。

マイノリティーについての活動をしていると、在日の人たちや被差別部落の人たちと話す機会がたくさんあります。よく、上の世代の人から「若い世代を、結城君みたいに元気にさせてくれ」というようなことを言われます。でも、それができるのは本人だけなのです。そこで僕は、若い人たちに、何々を糾弾するとか、行政からお金を引き出すという運動だけではなく、今の時代の運動、もっと違うことで貢献できるような文化づくりをしようという話をしています。

何年か前に、僕はインドネシアのジョクジャカルタというところに行けるチャンスがありました。それまで僕は、北海道の中で「アイヌ、アイヌ」と叫んでいて、多分アイヌしか見えていなかったと思います。そのインドネシアのジョクジャカルタでは、親に手を切られて道ばたにさらされてお金を集めてる子供たちがいました。また、IDをもらえないストリートミュージシャンの子供たち、セックスワーカーの子供たち、あとは、先住民とエイズの問題、先住民と宗教の問題、貧困の問題、今まさにアジアの国で、先住民文化が侵されようとしているのです。その原因の大半が、日本の企業で、箸をつくるために木を切ったりとか、国内では、環境問題に対して明るいですとか言いながら、アジアでは全く逆のことをしているという姿があります。追いつめられて潰されそうになった歴史があるアイヌ民族に何かできることがな

いのか、貧困層の問題だって何の問題だって、マイノリティーだったら解決できる糸口があるかもしれません。

私の父は本当に素敵な生き方をした人です。その父を私は尊敬しています。僕は尊敬する人がいて、本当に幸せだと思っています。和人の方の中にも、学生運動などで、お偉いさんに向かっていったという人もいます。でも、そのことを語ってないのです。みんなネクタイ姿になってしまって、子供たちに語っていないのです。表面の物語よりも、そういう大人の生き方というものが後からちゃんと文化になっていくのです。確実に子供たちは大人を見て成長します。僕らが、アイヌ民族として、アイヌ民族の大人として何をしていくのかということです。

今僕が考えていることで、タネプロジェクトというものがあります。「タネ」というのはアイヌ語で「今」という意味があります。この間、函館の東山というところで、僕の考えた物語をやってきました。なぜそれがタネプロジェクトなのかということですが、ユーカラをつくろうと考えたのです。何か、今を表現する、それが僕の役割ではないかと考えたのです。

それで、その東山というところでやった物語についてです。東山には、医療廃棄物が捨てられていて、土を少し掘り返すと、注射針が出てきたり、点滴の袋が出てきたりするのです。つまり、感染の恐れもあるということです。その話を聞いて、どうしたらいいのかと考え、一つの物語を考えました。それは、キツネの物語です。キツネというのは土を掘って食べ物など物を隠す習性があります。シチゴカ沢という沢があるのですが、その沢に住んでいるキツネが、子供に食べさせるために獲ってきた鳥を、埋めようと土を掘り返したら、注射針が大量に出てきた。次のところを掘り返したら、ビニールの医療廃棄物が出てきた。これじゃ、子供たちを育てられない。人間たちは大丈夫なのか。自分たちで自分たちを苦しめるようなまねをするなんてとんでもない。というようなことで、人間をたしなめるという物語です。

アイヌと言っても、着物や木彫りがすべてではないですし、今はいろいろな形で表現する若者たちも出てきています。それぞれの持っている力で、それぞれの組み合わせで、文化を作っていくというのが本来の姿だと私は考えています。それが、僕の提案する「今から未来へ」ということです。僕自身、そういうことを考えて活動しております。

それでは、これで終わります。イヤイライケレ。(拍手)